

## 宗因佐賀来遊時の一資料

関澤, 智子  
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/9434>

---

出版情報 : 語文研究. 77, pp.21-31, 1994-06-05. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 宗因佐賀来遊時の一資料

関 澤 智 子

## はじめに

西山宗因が寛文九年から同十一年にかけて九州を訪れたその足跡は既に先学によってかなりの部分辿られており、就中、佐賀に於ける連歌・俳諧両面での活発な活動については、大内初夫氏、田中道雄氏の研究などに詳しい。

ここに『哥仙』と題する一写本がある。現在唐津市立近代図書館に所蔵されている岸田文書中の一点であるが、内容を閲すると、宗因関係の俳諧百韻六卷、及び作者点者共に不詳の点取俳諧百韻の断簡から成る、まさしく宗因俳書と言うべきものである。収録百韻の内五卷は『晴宗因千句』、『晴宗因後五百韻』などの刊本に収められているのと同じのものであるが、刊本では省略されている前書が付されていたり、明らかに書写ミスに拠るものではない句形の違いを有していたりと、刊本とは別の底本を書写したものと考えられ、そこから披み取られる新事実も少くない。又、従来他書には見られなかった作品も収められており、書写、底本等について多くの問題

を有する本ではあるが、宗因研究において本書が非常に貴重な資料であることは間違いない。

本稿では、この『哥仙』の概要を紹介し、この本が有する問題点を押さえ、その上で本書から分かる宗因の足跡について若干述べるものである。

## 一 書 誌

本書は先に述べた通り、佐賀県唐津市の市立近代図書館に岸田文書中の一点として書蔵されているものである。半紙本一冊の写本で、縦二十一・三センチメートル、横十四・七センチメートル。袋綴じ墨付三十二丁。表紙は茶表紙で、題簽は無いが、左肩に、縦十三・二センチメートル、横一・五センチメートルの寸法で枠を墨書し、その中に「哥仙 全」と書名が書かれている。蔵書印は無いが、裏表紙見返しに「佐志 岸田」の識語があり、本書が嘗て岸田氏の蔵書であったことが確認される。

岸田氏は、唐津藩佐志組の大庄屋で、その庄屋記録が現在岸田文

書として残されている。その夥しい記録類に混じって若干の連歌・俳諧関係の写本も残されており、この一族の文芸に対するなごしかの志向が窺われ、ひいては本書の伝来に関して幾分の示唆を与えてくれるように思われるのであるが、現時点では、本書が如何にして岸田家の蔵書となったか、そのいきさつを示す手がかりは見出されていない。

書写は半丁につき平均十一行であるが、百韻一卷が終了したらその時点で丁を改めている。又、各巻の冒頭は、前書・作者名・句を合わせて九行から十一行になっており、必ずしも体裁は統一されていない。

書写者、及びその時期については本書には何も記されていないが、本文に関しては最初から最後まで同一人物の手になるものと見られ、近世中期頃の筆写ではないかと推測される。本文前の遊紙に「文化二年乙丑 裏打再表」と墨書されており、このことも文化二年からかなり遡った時点で本書が既に成立していたことを示すものと言えよう。

## 二 内容

本書には先に述べた通り全部で七巻の俳巻が収められている。以下にその一覽を示す。

- ① 「立つ年の頭もかたる翁かな」百韻 西翁独吟 『嵯宗因千句』  
(以下『千句』と略する) 所収 ※『千句』の初ウ三句目、二オ十一句目に当たる部分欠落

- ② 「跡とはん佐力本哥の花の友」百韻 西翁独吟 『嵯宗因後五百韻』(以下『後五百韻』と略する) 所収 ※『後五百韻』では西翁・素賢・如自・任他・朋之の五吟百韻

③ 「関はあれと花はなこそその御意かなし」百韻 西翁独吟 『千句』

- 所収 ※『千句』の三オ十句目に当たる句欠落

- ④ 「問は匂ふ梅や自身の取合」百韻 西翁独吟 『千句』 所収 ※『千句』の名オ十二句目に当たる句欠落

- ⑤ 「やとれとの御身いかなるひと時雨」百韻 西翁・如自の両吟

- ⑥ 「天にあらは地には恋慕の思ひ草」百韻 西翁・素賢・如自・可幸・任他の五吟 『後五百韻』 所収

- ⑦ 「夕露や麓に置くのつれく草」点取百韻 作者、点者共に不明

※三ウ以後欠落 宗因俳書としての本書の性格、それでいながらこの「夕露や」の発句が宗因作として他書に採られていないこと、更に合点の形から考えて、この巻は何者かの作に宗因が加点了たものと推測される。

以上のように、『千句』所収のものが三巻、『後五百韻』所収のものが二巻、そして従来知られている他俳書では見られないものが二巻という構成になっている。刊行された俳書二部と重複する内容が多いが、この『哥仙』がそれらの板本の写しでないことは本稿の冒頭部に述べた通りである。以下、その点について具体的に述べる。

まず前書の問題であるが、板本と全く同じ前書を有するのは④の「問は匂ふ」百韻一卷のみ、①・②・③・⑥の四巻は概ね板本で付されている前書よりも長いものを有している。例として①の「立つ年の」百韻を取り上げてみる。

①の前書は板本の『千句』では「独吟」とあるだけである。<sup>3)</sup>ところが、これが『哥仙』では以下のように長文化する。

春の始の御祝ハ貴方にむかいてしきたいの下にはいあかりて風はあらて市中のちりまふれ成老翁有忍徳有足にいたみなく腹に味ふ道なし人に恋られねは鼻ひる事もなくなす事なけれはまつ事なき春なくさみにひよくらひやうくたんの軽口にもあらぬ事を書付待りける也見る人ほくえむかへかめれとのとふまく耳に随ひぬ老ほれしつみゆるへしゆるされすハ□□□□<sup>3)</sup>

②・③・⑥も程度の差こそあれ、板本よりも長い前書を有している。特に②・⑥の『後五百韻』と重複する巻は、板本ではそれぞれ「一向衆の追善 前書略ス」、「去御奥方の追善 前書略ス」とされているのに対し、かなりの長文の前書が付されている。この一事を以てしても、本書が板本の写しなどではなく、全く別種の本を底本として筆写されたものであるということは明らかである。

次に百韻本文について見てみると、この『哥仙』所収のものと、『千句』『後五百韻』所収のものとの間にはかなりの異同がある。但し、その異同の大部分は誤写と思われるものや細かなてにをはの違いなどで、むしろ書写者に問題を帰すべきものと思われる。ところがそれだけでは片付けられないような違いも散見されるのである。例えば③「関はあれと」百韻では

- 質に置一振の太刀請出し(『哥仙』三ウ七句目)
- 一ふりの太刀を質より請返し(『千句』)
- 先いわふお具足の餅朝鏡(『哥仙』名オ一句目)
- 先すへてむかふ餅の朝かゝみ(『千句』)

のように明らかな句形の違いが見られる。ここまではっきりした句

形の違ではないにせよ、他の巻にも誤写に拠るとは考え難い異同が見られ、やはり板本とは別の底本の存在を想起させる。

それでは、この『哥仙』はどのような本を基に写されたものであろうか。本書の底本が未発見の現在、全ては推測の域を出ないが、ここまで述べてきたような特色から見てこの『哥仙』の底本は宗因の手元にあった句稿類とは考えられないであろうか。そうした草稿類であれば、板本で「略ス」とされた前書があるのも当然であるし、板行の際に推敲が加えられた板本と句形の違いを有するのにもかにも自然である。断定はできないが、『哥仙』の底本がこうした性格であるものという可能性は非常に高く思われる。

### 三 書写上の問題点等

本来は書誌の一部に含むべき事かもしれないが敢えて一項目立てたのは、本書には筆写態度の杜撰さ、あるいは筆写の際の底本自体に既に破損などがあったのではないかと思われる点など若干の問題点があり、後に本書から幾つかの事柄を読み取る際にも、その事は常に頭に置くべきで、場合によっては、決論を保留せねばならないほど重要な問題であるからである。

まず本書を見て目立つのは、かなり大きな欠落があることである。先に「二」の項で各巻の句の欠落状況を記しておいたが、この内①の巻の初ウ三句目から二オ十一句目の欠落は、その直前の初ウ二句目が本書の丁付で言えば二丁裏の十一行目でびったり終わっており、欠落後すぐの二オ十二句目が二丁表の一行目になっていて、その間の欠落分は二十三句では一丁分と見られる所から、筆写の

際の手書き落とし、或いは底本の不備という理由の外に製本のミス——最初のものか、又は文化二年の補修の際か——という理由も考えられる。これは⑦の最後の部分についても同様である。

しかし、それ以外の二ヶ所を見ると、③の場合、三オ八句目から十二句目に当たる十二丁裏の七行目から十行目が

すくなる道をおこしあめ箱

見渡せば御宮参ハ布引迄

村からすさわく野陳ハはなすゝき

露のしら玉ちらす鉄ほう

となっていて八行目と九行目の間にあるべき短句が無い。(『千句』

では「爰にて月を松原の幕」の句が入る) 同様に④の名オ十一句目

と十三句目は、本書の十九丁表の三行目と四行目に

おもしろさたまりやいたさん酔心

路次いりハまた早天月のかげ

と連続して書かれており、間に入るべき短句——『千句』では「ふれくこ雪笠やたもとに」——を欠いている。いずれの欠落も書写

者か底本かのいずれかに問題が帰せられるべきである。

次に、句全体ではないがその一部が欠けている場合がある。

木の丸殿の家(空白) きたり(③名オ六句目)

木丸とのゝ家老めきたり(『千句』)

暖口やふれ(空白) 公事(③名ウ二句目)

あつかひ事もやふれ公事なり(『千句』)

一のき(空白) 秋風そ吹(②初オ八句目)

うしろのかたき秋風そ吹(『後五百韻』)

音数かゝ考えて『哥仙』の本文に脱漏があることは明らかである。

但し、最初の例を見ると『哥仙』の空白部分に『千句』の本文から「老め」の二字を補うとちょうど収まりがつくように思われる。このことから、この箇所脱漏は書写の際に初めて生じたものではなく、底本に破損等があつて字が判読できなかった部分をそのまま空白にして書写したために生じたものと考えられる。後の一例は、「木の丸殿」の句のように説明はつかないが、「二」で述べたように板本と別種の底本に拠つたためそもそも本文の形が違つており、更に破損等のために底本の本文が乱れて解りにくくなつたのではないか。

また、

しんかんじんに月をなかむる

老らくハ思蜜半の秋の風(①三オ八・九句目)

心肝しんに月をなかむる

老らくが思案半の秋の風(『千句』)

(傍点は筆者による)

のように、字形の類似による単純な筆写ミスと見られるものも多く、底本、筆写態度共にかなり問題がある本であることは否めまい。

しかし、そうした点を割り引いたとしてもこの本の資料的価値の高さは間違いないであろう。そこで、こうした問題点に留意しながら、本書から読み取られる宗因にまつわる新事実を幾つか拾い上げていくことにする。

#### 四 「跡とはん」百韻より

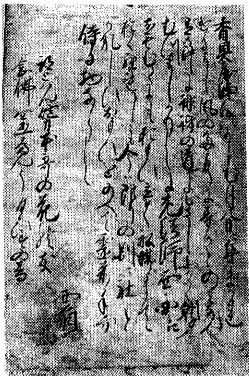
②の「跡とはん」百韻は、板本の『後五百韻』には無い長い前書

を有している。以下にその全文を掲げる。

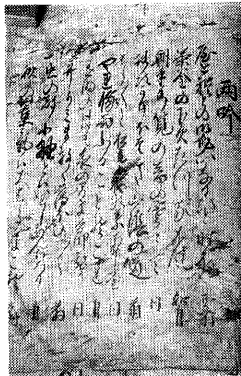
香具屋浄治にしむ月八日（七）ニ身まかれけるよし風のたよりに夢かとのみなん有か中に誹諧の道に心さしふかく朝夕むつまじかりに老法師西国におもむくにもおもひ立て船場までおくられしも今ハ限りの別に社とかなしひおもひをのへて靈前手向侍る物ならし

この百韻は、『後五百韻』では「一向衆の追善」としか説明されていないが、安永六年刊の『俳諧発句むかし口』にはこの百韻の発句が「あと、はむ他力本哥の花の友」の形で収められており、この句の前書には「香具屋浄治追善<sup>(5)</sup>」とある。故に、この百韻が浄治追善のものであるということ自体は目新しいものではないが、浄治が寛文十年か十一年かの睦月八日に没したというのは従来知られていなかった事実であり、又、宗因と浄治の交遊についてその一端を窺わせる記述も珍しい。

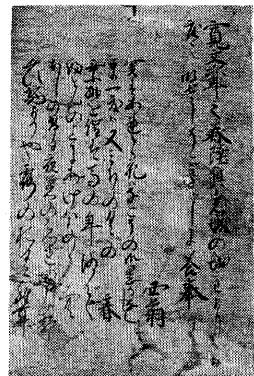
浄治は宇野氏で通称伝兵衛。明暦二年刊の『玉海集』に「吉野宇野氏」として浄治の発句が二句入集しており、初めは大和国吉野の住であったらしいが、寛文六年頃には既に大坂に移り住み香具屋を営んでいたらしい。延宝七年刊の『難波すゝめ』に高麗橋一丁目の香具屋宇野河内の名が見られるが、これは延宝四年刊の『古今誹諧師手鑑』に浄治が「大阪 宇野河内」として見えるのと一致し、その店が高麗橋一丁目にあったとがわかる。宗因との関わりについては、寛文六年七月二十七日に京都東山の正法寺の重阿弥に於いて浄治が興行した俳諧百韻に宗因も一座していることが知られている程度であるが、この前書の内容を信じるならば、宗因との俳道における交わりはかなり深く、相当に親しい間柄であったと思われる。



(c)



(b)



(a)

この浄治の事以上にこの巻で注目させられるのが、板本の『後五百韻』では佐賀の連衆との五吟百韻になっているものが、この『哥仙』では西翁の独吟として写されていることである。図を見れば解る通り、本書では、独吟の場合は作者名が前書と発句の間に大きめの文字で記されており(㉔)、複数の作者による場合は発句以下作者名は全て句の下に、句自体の文字とはほぼ同じ大きさの字で書かれている(㉕)。この「跡とはん」の巻の場合は明らかに前者に属している(㉖)。つまり、少なくともこの『哥仙』の底本の段階では、この巻に西翁、即ち宗因以外の作者が関与した形跡が全く見られなかったはずである。

もちろん先に述べた通り、本書には少なからぬ問題があり、又、板本の『後五百韻』に一巡のみとはいえ五名の作者が明記されている以上、この百韻が本来宗因の独吟であると断じることができない。しかし、㉕の如自との両吟や㉖の佐賀連衆との巻が、挙句に至るまでの全ての句に作者名を付しているのと比較した場合、更に、この「跡とはん」の巻と同様追前俳諧である㉗の前書には「老をたすくる二三人西国のなまり声ながら(中略)さへつり集まりて奉るもりならし」と連衆の存在が明示されているのに対し、「跡とはん」の巻では飽くまでも宗因個人の浄治への追慕の念が語られているのを見る場合、浄治と佐賀俳人達との関係が殆んど考えられない現在、この『哥仙』という本を信用するならば、この百韻は宗因の独吟であると言わざるを得ない。

なお、この百韻の脇句は『後五百韻』では素賢の作として「念仏四五人驚の声」となっており、いかにも四、五人で追善興行を行ったようであるが、『哥仙』では「念仏四五へんうぐひすの音」となっ

ている。書写の問題とからんでくるので一概には言えないが、この百韻の草稿の段階で「四五へん」だったものが出版の際「四五人」に改められた可能性があり、更に想像を逞しくすれば、独吟だったものを五吟百韻にするためにそうした改変が行なわれたとも考えられそうであるが、今は可能性を指摘するにとどめておきたい。

## 五 「関はあれと」百韻の成立年次

この百韻にもそれほど長文ではないが前書があり、「寛文六年之春陸奥岩城の城主より度々御せうそこ有しに答奉テ」とある。この百韻及びその発句には他の諸書でも前書が付されていて、『千句』では「奥州へ遣ス」、延宝二年成立、風虎編の『桜川』では「みちのく岩城へ申つかはしける」、『俳諧発句むかし口』では「岩城の城主たび／＼御消息ありしに答奉る」となっており、いずれにせよ奥州盤城平の風虎内藤義概に贈ったものであることは間違いない。ここで問題にすべきなのは「寛文六年」という年次である。

この百韻の成立年次に関して、米谷肇氏は「桜川」の頭註に「寛文七年未三月下旬」とあり、二オ二句目に「寛文六年きく時鳥」とあることから、寛文七年をこの作品の製作年と推定される下限の年次に当てている。それに対して、江藤保定氏は第三句目の「乗りかかけを催すむまの年越えて」から、丙午の寛文六年を成立年次とし、「寛文六年きく時鳥」は、その打越の句の中の「釈迦牟尼如来」から前句の「卯月八日」が導き出され、その「卯月八日」から「時鳥」へと続くのだから必ずしも寛文六年四月以降の製作を示すものではないとしている。

『桜川』の頭註の「寛文七年未三月下旬」というのは、『俳諧大辞典』にもあるように風虎の手許に句が到着した時点を示すものなので、製作年自体は寛文六年、七年のどちらでも当てはまるようだが、「むまの年」という句中の言葉から寛文六年作とする江藤氏の説は妥当なものであり、『哥仙』のこの前書もそれを裏付ける一助となり得よう。

## 六 ひと時雨

⑤の西翁・如自両吟百韻は、発句は別として従来未紹介の資料である。よって以下にその全文の翻字を掲げる。

### 両吟

やとれとの御身いかなるひと時雨

茶釜の下火たつる木風

朝手水笥の音の寒くて

路次よりほそき山陰の道

はら／＼と松葉槓の葉ちりましり

やれ俄雨ふることそこれ

有明の月も夜の間に節替り

歌よみまねく薄ほの／＼

虫の声小野とはいわしちんちろり

秋の景気は大はらにこそ

さひしさは其色としも黒木売

袋ひとつに何やらかやら

世をかるく出立し旅の取所

庵の留守は秋風の声

谷の戸を尋られしはいくか比

御状の後はつもるしら雪

逢ふ事もなきの涙の厚氷

月にと契るふちは瀬まくら

思へた、何かつねなる二つ星

眼の前に四方山のいろ

三吉野や余の物なしに花斗

たはこもせて永き日暮

二只ひとり小そうり取や霞らん

隠居所も春は来にけり

来征鼓も古里に音すなり

死たかましもつらき恋やみ

おもひ寝の枕刀に手をかけて

物怪わはし夢かうつゝか

是は扱まさしかりける占やさん

はしり出て見よ蜘蛛のふるまい

萩風にすへ／＼うこく一葉舟

ゑんの下行水の月かけ

いさきよくかゝるゆかたの露の音

かすかくあせもよう／＼に成

ほねを折手をおり／＼の玉章に

なかれたつるやいろはたれ／＼

有ニは無なき名斗のちわ狂ニひ

かくれみの笠ほしや通ひ路

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁

自翁



思もふ事打出の小槌一打に

いわてたゞにや針はよし〜

大鱸釣た所でうなつきて

月につれしをそれも合点

物語須磨の浦半の秋さひし

松の子油をさてもその〜ち

横手をも打なめたる作り庭

夕涼みして誰そこい〜

山陰に絵筵はらて茶のみた

楽寝の夢にあらし吹なり

たわふる〜胡蝶も花も百年目

屋敷よいかわ身の後の春

三いたつらな子を思ふやみは一霞

傾城町に鳴よるの鶴

しゃみせんにのするや恋の和歌の浦

見れば目もとのしほみち渡る

こととはんまたふり袖の海士小舟

泊瀬まいりはたれゆへぞろそ

旅の空きんちやくかるき鐘の声

あかつきかけてすりのあい宿

お手枕人をしのふのもち衣

十徳すかたあはれあわれさ

せきあへぬなみた一まい葉箱

是非におよはぬ牢人のはて

落さる〜城もむかしに成りにけり

自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁

月こそ残れたきの水ふね

三秋までもしはしと頼むところてん

筥三枚露の木のものと

道のへのかりほの庵かせんちん□

垣根あれにしあとの野鳥

都さへうつせはやとて狐こん

いかに平家のすへの氣ちかい

大酒もへん〜たりひわの声

人あつめする商人の妻

壁襖口舌いさかい何事か

さつてのけよと鳴きり〜す

白露の玉の野かけに麿相者

月の光もうす□さきわん

花もいさこんにうこんに染小袖

彼岸まふては誰の後室

三乗物に長刀一振かすませて

車へいさらさらり祇園会

簾卷畳をたてた夕間暮

す〜はらいする雪の山さと

指ふかす掛絵の梅も冬こもり

なにわの事も酒の口切

さかい衆浦伝ひして夕出に

弥生三日は待そかならず

見え来る蓬の餅の蓬かり

やいとすへはや去年の古跡

□翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁自翁

かゝみ行せなかにのかさなりて

月をもめてしくり戸の内

ひとり寝を四帖半敷冷しや

部屋住とふや雁も声く

所化鉢の米も色付秋の田に

南無阿弥施仏布留の中道

楽書の跡はかなしや神の春

水こりいかにくさめくつまめ

帷子に吹白妙の富士嵐

東路さしてあふき一本

御殿と夕部の花に舞の袖

はいまつわれよ藤の門口

以上のように両吟で百韻が巻かれているが、この巻を見るとすぐ

に想起されるのが、天保九年刊、生川春明編の『誹家大系図』の中

の如自に関する次の記述である。

石井氏嘲鷗子ト号ス肥前佐賀ノ人ナリ始立圃梅盛ニ親ミ宗因西

国ニ遊ヘル期間弟トナリ則両吟二百句ヲツラヌ〔一時雨〕ト云冊

子是也

この『一時雨』という書名は、この『誹家大系図』の引用書目録

の項にも『一時雨百韻』として挙げられている。又、元禄五年刊の

書籍目録に「同百韻（一時雨）」とある（「同」とは宗因作を示す）とある

「一時雨」も、『誹家大系図』所載のものと同一のものと思われ、元

禄五年の時点では既に刊行されていたと考えられる。しかし、今ま

で板本『一時雨』は発見されておらずその出現が待たれていたが、

この『哥仙』所収の「やとれとの御身いかなるひと時雨」を発句と

する西翁・如自両吟百韻は、まさしくこの『一時雨』という本の姿  
を明らかにする上での最も大きな手がかりと言えよう。

如自と宗因の両吟、しかも発句中に「ひと時雨」の語を含むこと  
から、『誹家大系図』に述べる所の両吟二百句の内の百句は間違いな  
くこの『哥仙』所収の作品と同一のもので、『一時雨』という書名自  
体もこの発句によって命名されたと考えられる。しかし、何分にも  
『誹家大系図』で「二百句」と記されている内の百句しもなく、し  
かもこの『哥仙』自体が再三述べてきたように非常に問題のある写  
本なので、この『哥仙』の「やとれとの」百韻のみで板本『一時雨』  
の姿が完全に捉えられるわけでないことは言うまでもない。しか  
し、従来全くその姿の掴めなかった『一時雨』という本の、言わば  
中核を成すと言っても過言ではない部分を知り得るといふ点におい  
て、この『哥仙』は少なからぬ意義を持つと言える。

如自は佐賀藩家臣石井又右衛門忠俊。その近世初期の佐賀俳壇に  
おける活躍ぶりは夙に中西啓氏の研究に詳しいが、彼は連歌の席で  
も宗因と同席している。即ち、寛文九年十月十一日多久安胤興行の  
賦何人百韻、同じく十月八日川上実相院での賦何路百韻がそれであ  
る。「やとれとの」百韻は、寛文十年に成立した可能性も無いではな  
いが、発句の季から考えても、この寛文九年十月の連歌興行の間際  
を縫って巻かれたものではないかと想像される。

## 七 「天にあらは」百韻は誰の追善か

⑥ 「天にあらは」百韻の前書は『後五百韻』では「去御奥方の追  
善 前書略ス」とあり、寛文十二年刊の『手練舟』に収められた発

句の前書では「女のなく成たる人」となっているが、『哥仙』では以下のようにある。

陸奥様にしへ年の秋かくれさせ給ふ□□<sup>（下）</sup>遥なる世界にて漸く此頃風の使りに夢かとのみしのふの御乱れ心地思ひ奉ながら老をたすくる三人西国のなまり声なから是も又珍しきふしやとさへつり集りて奉るものならし

ここでは追善の対象が「陸奥様」となっており、従来知られていた前書の「御奥方」「女」といった言葉に一見そぐわないようである。しかし、それならこの百韻が夫を失った妻の「しのふの御乱れ心地」を思いやったものかと言えばそうではないであろう。発句の「天にあらは地には恋慕の思ひ草」は、あの「長恨歌」の有名な表現を踏まえている所から、むしろ妻に先立たれた夫の悲しみを描いたものと考えられるし、何より宗因がこれほど真心を込めた甲いの詞を贈るにふさわしい陸奥がらみの人物としては先にも述べた磐城平藩主内藤義概以外に考え難いのである。

義概は貞享二年に六十七歳で逝去するまでの生涯に二度正室を迎えている。最初の室は松平山城守忠国女であるが万治二年八月二十七日に没している。次いで三条左大臣実秀女を正室を迎えるが、この女性も寛文九年八月二十九日に亡くなっている。「天にあらは」百韻の前書に見られる「陸奥様」がこの三条氏であるとすれば、宗因は寛文十年に九州の地で前年のこの訃報を受け取り、その年の秋に佐賀で地元の人々とこの追悼吟を詠んだことになり、現在知られている宗因の足跡とちょうど符合することになる。

但し、先にも触れた通り藩主その人ならいざ知らず、その奥方を「陸奥様」と呼ぶのはやはり不自然である。再三述べてきた本書の

書写上の問題などに拠るかとも考えられるが、まだ最終的な結論は出すべきではないのかもしれない。しかし、その他の条件から考えると、この百韻は妻三条氏を失った風虎への弔意を込めたものと見られ、そのことがはっきり確認できたならば、宗因と風虎の雅交に關して新たな事項をつけ加えることができるようになるものである。

#### おわりに

以上、この『哥仙』という本の概要とそこから新たに知り得た事柄について述べてきた。底本、書写態度等に問題を有する本ではあるが、従来知られなかった宗因に關する情報を与えてくれる得難い書である。

この本の伝来が詳しく解らない現在全ては憶測の域を出ないが、この『哥仙』の底本は宗因佐賀来遊時に地元に残された句稿類ではなかろうか。佐賀に訪れた際に詠まれた作品、及びそれ以前に成立した作品(①・③・④)<sup>(17)</sup>——これらは地元俳人の求めに応じて書写して与えられたものだろうか——が草稿の形で佐賀に残されて、それを底本にしてこの『哥仙』が写されたと見れば、「二」で述べたような特徴も説明がつく。だとすれば、宗因の作品が句稿の段階から出版に至る過程の中でどのように手を加えられているかという経過をも示してくれることになり、そうした面においても、実に有意義な書と言える。

- (1) 大内初夫氏「近世九州俳壇史の研究」第二章「談林時代の九州俳壇」(昭和五十八年九州大学出版会) 田中道雄氏「鹿島鍋島家蔵『宗因連歌』」(佐賀大学文学論集) 三三〇頁
- (2) 『千句』の引用本文は『近世文学資料類従 古俳諧編28』所収の影印による
- (3) 『哥仙』本文の引用は可能な限り原本に忠実なように努めた。但し、漢字は現行の字体に統一し、判読不能の箇所は□で示した。また破損等はあるが残った部分から字が推定できるものは□の横に( )に入れてそれを記した。また、明らかに不自然な箇所には横に(ママ)と記した。
- (4) 『後五百韻』の引用本文は牛見正和氏「嵯宗因後五百韻——刊年の再検討——」(『ヒブリア』九十号) 所収の影印による
- (5) 引用は東京大学竹冷文庫蔵本による
- (6) 『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇第二十三巻 貞田談林俳諧集』所収『梅翁俳諧集』の加藤定彦氏による解題参照
- (7) 『季吟十全集』(寛文十二年刊) 所収
- (8) 引用は『桜川』(昭和三十五年 大東急記念文庫) による。
- (9) 『新編梅翁発句集草稿』(真下三郎先生退官記念論文集 近世・近代のことばと文字) (昭和四十七年 第一学習社)
- (10) 『宗因千句論考——各巻の成立年代について——』(『鶴見大学紀要』十二号)
- (11) 『桜川』の項(板坂元氏の執筆) 参照
- (12) 引用は九州大学文学部蔵本による
- (13) 『佐賀俳句史(二) 石井如自』(『新郷土』八巻七号)
- (14) (1) 田中氏論文参照
- (15) 『内藤侯平藩史料』巻三(昭和三十六年平市教育委員会)
- (16) (15) に同じ

## 付記

(17) これらの巻の成立年次については(10) 江藤氏論文参照

本書の存在は田中道雄先生に御教示いただき、且つ種々の御教示を賜った。本来田中先生が手がけられるべきところを、こうして研究の機会を与えて下さった御学恩に対してお心から感謝致します。又、唐津市立近代図書館には貴重な資料の閲覧・紹介を快諾いただいた上、幾多の御便宜を賜り、併せて感謝致します。